

新技術・情報名	ヒメヨコバイ類による中晩生カンキツ類の被害と防除法	推進部会名	果樹
実施場所	三重県農業技術センター・紀南キャンパス	分類	※②

1. 成果の内容

1) 技術・情報の内容及び特徴

ヒメヨコバイ類によるカンキツ類のニはん症は、直径3~10mmの円形に被害部の細胞間隙のみ陥没し、生理障害などによる場合のように被害部全体が陥没することなく、被害症状の判別が明らかとなった。

加害後の被害痕症状はネーブルオレンジ、伊予柑、甘夏柑で3~6日後温州ミカン、セミノールは20後に発現する。

カンキツ類での寄生虫数と被害果率の間に相関関係が認められ(第1図)、秋期にヒメヨコバイ類の防除を実施することにより被害を軽減することができた(第2図)。また本虫による被害果は貯蔵中にニはん症及び腐敗果の助長することはなかった(第1表)。

2) 技術・情報の適用効果

ヒメヨコバイ類の発生状況は地域により異なるので中晩生カンキツ類でニはん症の被害が多い園では発生原因を調査し、本虫に起因する場合には10~11月に防除を2回程度実施することにより被害を70%軽減できる。

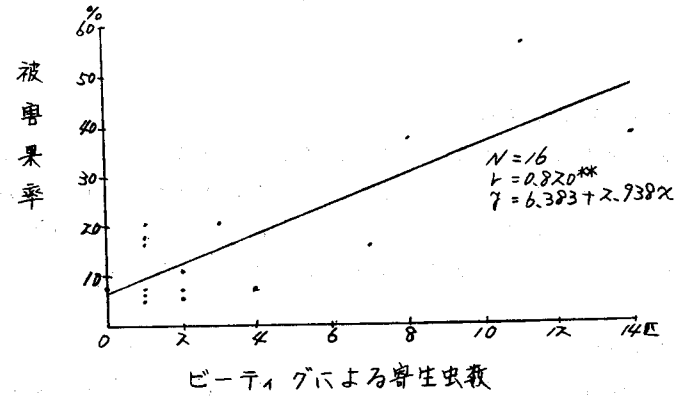
3) 適用範囲

中晩生カンキツ類の栽培地域

4) 普及指導上の留意点

- (1) 被害果は甘夏柑、オレンジ類、セミノール、宮内伊予柑などで多く、大谷伊予柑では被害痕跡が不明瞭である。
- (2) 階段畑や散在園など圃地周辺に畦畔の多いところでは防除の必要性が高く、また畦畔、雑草の刈取り、除草により本虫の被害を軽減することができる。
- (3) 防除はミカントップ剤の1,000~2,000倍液を収穫前90日までに散布する。

2. 具体的データ



第1図 ヒメヨコバイ類の寄生虫数と被害の関係 (寄生虫数は11月、被害果数は2月調査)

第1表 貯蔵中におけるニはん症(生理障害)及び腐敗果の発生程度

項目	生理障害によるニはん症発生率			腐敗果率				
	調査数	黄色斑	褐色斑	調査数	緑かみ病	白かみ病	軸腐病	計
無	108	5.6%	1.9%	123	6.5%	4.9%	0.8%	12.2%
ニはん数 1200果	121	1.7	0.8	125	3.2	0	0.8	4.0
ニはん数 3000果	80	1.3	0	92	9.7	2.2	1.1	13.0

注) 供試果実は1月24日収穫した川野甘夏を使用し、2月6日から4月26日までポリ筒袋で常温貯蔵した。

供試薬剤	試験 I 被害果率(度)					試験 II 被害果率(度)				
	10	20	30	40	50	10	20	30	40	50
ミフロデナホシ水 1,000倍	[Bar chart]					[Bar chart]				
ミフロデナホシ水 1,000倍 770-D水 1,000倍 } 混用	[Bar chart]					[Bar chart]				
ミカントップ乳 2,000	[Bar chart]					[Bar chart]				
無散布	[Bar chart]					[Bar chart]				

第2図 ヒメヨコバイ類の防除試験(55年度)  
注) 薬剤散布日 試験I(10月31日/2月3日) 試験II(10月27日/11月6日)

3. その他特記事項 中晩生カンキツに対するミドリヨコバイ類の被害実態調査及び防除対策試験、昭和58~59年度 県単